

## 新刊 紹介

For some in ancient books delight,  
Others prefer what moderns write:  
Now I should be extremely loth  
Not to be though expert in both.

K・レンナー著、加藤正男（法工学部教授）訳  
「私法制度の社会的機能」 京都・法律文  
化社、A5判二五二ページ、八〇〇円。

本書は、一九二九年に出版されたカール・レンナーの名著「私法上の法的諸制度とその社会的機能——ブルジョア（氏）法批判への研究」の全訳である。レンナーは、すでに一九〇四年にヨゼフ・カルナーという匿名でこの書物の前身を発表しているが、ここで訳出されたのは、のちに増補改訂されたものである。

レンナー（1870～1950）はオーストリーのマルキストであるが、彼は波乱に満ちた時代背景のもとで、理論家として、また政

治家として活躍した。理論家としては、たんに法学者であったのみではなく、経済学の分野にもすぐれた業績を残している。政治家としては、一九〇七年に国会議員に選挙され、第一次大戦後の新オーストリー共和国の初代首相となり、第二次大戦後は臨時政府の首相さらに第二共和国成立とともに初代の大統領となっている。このように多彩な生涯を送ったレンナーの法理論は、きわめて広い視野の上に立っており、本書も彼自身「はしがき」でのべているように法学的研究と経済学的研究という二つの分野の限界領域を取り扱ったものであるといえよう。

本書は、一言でいえば、私法制度において基本的な意味をもつ所有権の社会的機能を科学的に分析し、それを通じてその副題が示しているようにブルジョア法制度に鋭い批判をあたえたものである。第一章「法制度と経済組織」は、いわば序説的部分にあたり、第二章「所有権の機能の変遷」では、資本主義社会における所有権の社会的検討が加えられている。第三章「機能の変遷の社会学的分析」においては、機能的側

面からみた所有権の歴史の変遷過程がえがかれ、とくに最終節では、現代から将来への法発展の方向が展望されている。

ここで展開されている彼の理論には、訳者が解説で指摘しているように「修正マルキスト」としての側面がみられるともいえる。

訳者である加藤正男教授（民法専攻）はこれまでも、レンナーの法理論についていくつかの論稿を発表している。本訳書をもみても、レンナーについての訳者の造詣の深さがうかがわれる。また、読み易い訳文という配慮もみられ、巻末にはレンナーについての解説がある。

「社会科学としての法学」の研究を志す人たちのために、本訳書の出版はまことに有意義であると思う。加藤正男（八木鉄男）  
中瀬寿一（校友）著「日本広告産業発達史」  
京都・法律文化社、菊判五二六ページ、定価二〇〇円。

大量の広告が毎日のようにわれわれの生活の中に浸透している。テレビの開発以来この傾向は特に顕著である。近代の広告は明治以降、新聞の普及とともに発達し、そ

の後、大正デモクラシーと広告、さらに戦後の電波媒体開発によって量的、質的に大きく変化してきた。このことはいうまでもなく資本主義の発達にもなって広告が発展してきたことを意味する。

かくて、現代の独占資本主義段階の広告は独占企業の広告によって代表されることになるのであるが、このような広告を推進してきたものが広告代理業である。少なくとも近代的の広告に関する限り広告の発展は広告産業、あるいは広告企業の発展と結びついている。

本書はこのような観点から、わが国における広告産業の発達を日本資本主義の発達と結びつけながら詳細な資料に依拠しつつ展開している。

特に本書において中心となるものは広告産業発達における時代区分である。それによると、第一期新聞広告草創期（幕末—明治一〇年頃—日清戦前後）第二期新聞広告啓蒙期（明治一〇年頃—日清戦前後）第三期新聞広告の成長期（日清戦—日露戦前後）第四期新聞雑誌の発展、海外広告の展開（日露戦—第一次大戦前後）第五期新聞雑誌広告の開花、

広告企業の老舗化、海外支店設置、案内広告業者続出（第一次大戦—満州事変前後）第六期新聞雑誌広告の絢爛期、案内広告業者専属化（満州事変—日中戦前後）第七期広告の戦争協力、統制期（日中戦—太平洋戦争）に分けられ、最後に戦後における広告産業の本格的成立期となる。戦後の発達史は再出発期（一九四五—四八年）日本独占の復活にPR利用（一九四九—五〇年）日本独占再建と電波媒体の開発（一九五〇—五四、五年）テレビ時代開幕、近代化PR期（一九五五、六—六〇年）に分けられる。

著者はこのような発達史の中で、広告企業が資本主義的商品生産の発達とともに発展し、独占段階においては独占的大規模製造業者の商品販売のためにその主力を志向させながら広告企業自らも独占化していく過程を分析する。

さらに、資本自由化後の広告企業については、アメリカの独占的広告企業の進出と日本広告独占の従属化をとりあげる。

広告は費用支出者としての独占的企業と広告を技術に展開していく広告代理業者が

媒体を通して実現する。この関係が資本主義の発達という経済的基盤の上においてどのように展開されているかということが分析の焦点になるものであり、したがって、本書は単なる物語的な叙事詩ではなく、広告産業からみた日本資本発達史とみることもできるだろう。

（木地節郎）

林秋石、桜井忠一、宮井敏、里井陸郎（校友・教授）「英訳・花伝書」住谷・篠部奨学金出版会、B 6判一八〇ページ、定価一〇〇〇円。

初しぐれ猿も小蓑がほしげなり 芭蕉

この句を英訳するときにはモンキーがレイコンコートを欲しているという風にしかしいようがないとしたら、日本の文学はほん訳をあきらめた方がいい。初しぐれという季語が持つイメージ一つにしても、日本の風土や気候、そして文化の中でぞでたられてきた季節の感覚を共有しない場所へ移して実感させることは不可能に近い。その上時雨にぬれそぼった寒げな山猿と、この小動物に向けられた芭蕉の愛やその上に重なる孤独な旅のわびしさを感ぜないで小蓑という詩語にこめられた心の深さをさとること

はできないだろう。古典的な短詩芸術の暗示的象徴的な意味への通路は、現代ではもはやほとんど遮断されているといつていいすぎでないのだから、まして外国のことばに正しくおきかえることは始めから無理というものだ。

ところが、有難いことに、そして日本の古典にとつても甚だ名譽なことには、情緒や感覚によりかからない明快な論理的構造をもった思考や文体から成る芸術論が遺されている。それらの中の最もすぐれた古典が「花伝書」である。勿論そこには室町のルネッサンスを生きた世阿に固有の独特なニュアンスを持った難解な表現があり、たけ・位・嵩たかというような歌論に影響された奥行のある抽象概念に近い言葉も頻度が高いのであるから、これをそのものずばりに英訳することはやはり困難であった。しかし、花伝書はもともと能楽という舞台芸術のあり方やその修行についての実践的な課題にこたえた方法論であるから、叙述は論理的体系的であるとともにきわめて具体的な内容を持っていることが、ほん訳を比較の容易にさせたといえる。そして、芸術論

美論演劇論であるばかりか、すぐれた教育論でもあり人生哲学でもあるという多面的な花伝書の真髄をある程度正確にほん訳することができたとしたら、それはむしろ世阿自身のすぐれた芸術的人格の力であるだろう。そしてそのことは、能という芸術がきわめて古典的伝統的な民族の芸能でありながら、その暗示的象徴的な美的様式表現の故に、かえってより一そう世界的国際的な理解と享受を可能にするところの造型的な歌舞劇であるという本質ともかかわり合っているであろう。

それらの点をふまえて考えると、「花伝書」の外語訳は、日本の文化の固有性民族性を国際的世界的な視界にひろげてゆくための、一つの思想的な契機を持つものとして評価されていいだろう。共訳者の一人としてそういうことはいいにくいだが、このほん訳事業の意義はそれ自体明らかにしなればならない問題である。尚、私の極めて乏しい語学力を通してもしもいえることは、林秋石教授の総仕上げによって大変流暢明快な英文になった事である。原文をよむよりは遙かによみ易く分り易いことを請合せて

おく。

〔附記〕本書出版に当っては同志社大学人文科学研究所の研究・出版助成金に負う所が大きかった。にもかかわらず印刷会社倒産という不測の事態にあい、結局、住谷篠部奨学会の援助によって陽の目を見ることになった。双方の関係者諸氏に深く感謝の意を捧げたい。

（里井陸郎）  
福田哲雄（文学部教授）著「現代人の精神異常」京都・ミネルヴァ書房、新書判一八五ページ、定価三六〇円。

本書を畏友福田哲雄君から贈呈され、筆が立つ男だわいと感心しながらも、一通り頁を拾いよみましただけで、じっくり読まずに多忙な仕事の方にかまけている中、福田君からの年賀状で本書はすでに二版が出たときかされた。最近やっと落着いて読みなおす機会があり、内容のいろいろな点で感心させられ、もっと早く書評を書くべきだったと福田君にすまない気持ちになっていく。本書は精神病学入門と副題がついているように、精神医学の殆んどすべての領域を平易にかつ要領よく解説しているのであるが、著者が実際に行なってきた大学の一

般教養課程の講義にもとづいて書かれたものに、いくつかの講演会の覚え書きが加えられたものであるだけに、一般人にはやや難解とされ易い精神病理学の各立場なども実に要領よくまとめあり理解しやすい。

精神医学に関する啓蒙的な小冊子は最近では少なからず出版されているが、それらは多くは「精神分裂病の心理」とか「異常人格」または「夢」など精神医学の中の一領域に関して精神病理学の立場から詳述したものが多く。これに反して精神医学の全領域を一通り解説しているものは専門の医学書や医学生向きを除くと一般啓蒙書としては意外に数少ない。その点で本書はまさにこの趣旨に沿った良書と言うべきものである。

本書の特徴は従って一面では医学生の子の精神医学入門書としても役立つ広般な内容もっていることであり、しかもそれが小冊子の中に濃縮されていることであるが、他面では通常の教科書とは異なり、一般向きに理解しやすい文章で説かれていることである。しかし特に注目すべき本書の特徴は第二部で精神障害を理解するために必要な

知識と理論と題して説かれている部分であろう。ここでは心理学の基礎知識、精神障害の身体的立場、並びに心因論的立場、心身論などが柔軟な表現によって批判的に概説されている。ここに著者のすぐれた知識と消化力が示されているが、このことは米國留學生生活を含む長年の経歴からも分るように著者が基礎科学と臨床精神医学を幅広く修得した研究者であるからこそ可能になったものということが出来る。

本書がこううした特徴をもっている故に一般学生のみならず、精神衛生に関係する職場の人々、更には一般医師にも新しい精神医学の入門書として大いに推せんできることは著者の友人としてこの上なく喜ばしく思う。

最後に今後加筆する際の希望をのべて、本書がますますすぐれた書となることを祈りたい。それは第五部の現代人の精神障害と異常性という魅力あるテーマを取上げた以上、ここにかんがりの頁数を与え、既成の大家にない斬新な著者の着想を盛ってほしいものと思っている。(医海時報第四〇三号より)

(東京大学助教授・高橋良)

マルタン・デュ・ガール著、店村新次(商学部教授)訳『生成』京都・法律文化社 B6判三二八ページ、定価六〇〇円。

『チボー家の人々』が久しく若い読者に深い影響を与えてきたが、デュ・ガールの処女出版である『生成』が彼の死後十年にあたる今年に、始めて訳出されたということは、彼の偉業に対する記念出版として有意義である。さらに本書の刊行は『チボー家』の理解を深める手掛りを与えるのみならず、若い人々の生き方が問題になっている近頃、時宜を得たものであるといえよう。

『生成』の草稿は作者が二十七才の時、コロイヤミレーなどが好んで題材とした美しいバルビゾンのフォンテーヌブローの森の宿で一気呵成に書かれた。もともと一氣に創作した彼の態度は、慎重で周到な計画のもとに、長期にわたる労作と推敲を旨とした厳しい彼固有の方法には似つかわしくない。しかし、処女作『ある聖者の生涯』の失敗と、それに伴う自己喪失への焦躁感から、自己回復の手段として、本書が数週間の中に生れる必然的な条件があったのである。ここには世代の相違・父と子の衝突・

宗教問題の対立・青年の精神形成の過程など『チボー家』に扱われている数々のテーマの萌芽がみられる。後者における主要テーマである歴史と社会に対する批判は、『生成』では明確にあらわれていないが、「……世俗的センスや経験や、簡略主義的な人間観・社会観」をもつ古い法曹アンドレの父をめぐるブルジョワ家庭や、社交界を通じて描かれたブルジョワ社会に対する作者の鋭い観察の中に、はっきりと社会批判がうかがわれる。次に本書において見逃すことのできないのは、デュ・ガールの文学精神が主人公アンドレと対照的人物である友人ベルナルルの生き方と文学論によって示されていることである。「いいかい、僕にはひとつの鉄則がある……文学という奴だが、やりたかったら、大いにやるべしだ。しかし金輪際、そんなことは口にだすべきじゃない……ともかく、よいものを書き、年期をいれたあとでなければ、みだりに口にすべきことじゃない。……」とベルナルルはいう。長期にわたる忍耐をもって、自己を保持し、孤独にたえ、実現してゆくことこそデュ・ガールの生涯の文学精

神であった。しかしアンドレは反対である。情熱と知力と活動力に溢れながらも、孤独に耐えることができず、持続性に欠ける彼は、文学作品を構想し、あるいは激しい恋をし、あるいは華々しい事業を計画しても、結局は人生の落伍者の路を辿る。しかしアンドレは単なる怠惰による落伍者ではない。真摯な活動的な落伍者なのである。ここに作品としての価値と魅力があると考えられる。本書を通覧して思うことは『チボー家』が読者に対し、より社会への関心をひく時、『生成』は読者の内面の世界にはたらきかけていることである。デュ・ガールはここで、次のように若い人々に訴えているのではないか。自己を失わず、孤独の中で努力せよと。

最後に訳業について触れる。訳者は原作者の若さを訳文の上に巧みに表現している。とりわけ場景・感情・心理の描写や行動の叙述は、力動的にいきいきと訳出され、事物さえも脈うっているようである。読者は、いわばドラマを見るがごとく人物のうごきにまた場景にひきこまれるであらう。

(泉)

## 史料彙報 第一集

同志社記事 (明治8年8月23日～21年5月25日) .....	4
同志社記事 (明治8年11月29日～11年1月22日) .....	31
興風会日誌 (明治19年1月23日～21年11月27日) .....	53
同志社広告 (明治11年6月) .....	73
同志社女学校広告 (明治11年6月) .....	74
生徒族籍氏名一覧 (明治22年1月調査) .....	75
熊本バンドの青年諸子に与えたL. L. Janesの書翰 .....	103
解題 .....	104

発行・同志社史史料編集所

頒 価 700 円